

# うきたむ

第4号

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

1994. 11. 3

(山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL 0238-52-2585)



7月30日 土器づくり教室 「完成した土器を手にして」

## 「いにしえ」への畏れ

山形県教育庁文化財課

課長 阿部 克人

空を見上げていると、ふと「この景色はいつか見たような」そんな気がすることがある。夢に出てくる場面でも同様の経験をする。記憶を辿っても思い当たる節はない。不思議な気持ちにかられてしまう。

前世の思い出がよぎる等ということもないだろうから、きっと物心のつかない時分に出会った光景が蘇ってくるのかも知れない。

ひたすら懐かしい薫りだけが広がっていく。人は、記憶の奥までも掘り起こし、追憶に浸りながら己の在ることを確かめているのだろうか。

そしてそれは、今の生を突き抜けて連綿として続いてきた命を逆上る。

古代住居の柱跡を見、欠けた土器に触れるとき、密かに騒ぐ血がある。

この腕には何が盛り付けられたのか、どんな家族での夕げだったのか、上った話題はと際限のない想いが募る。

所詮は頭に浮かぶドラマに過ぎず、その確証を得る術のなさにはらだたて苦笑してしまうのだが、しかしそこには明らかに時を刻んだ巧まざる生活があり、敬けんな祈りがある。その響きが魂を揺り動かし、世代を貫いた出会ったことのない追想をもたらす。

わずかばかりの実体験を飲み込みながら、数千年、数万年の時空を駆け巡る心が、「いにしえ」を彷彿させ、生きていることの証しを与えてくれる。

だから、考古は畏れである。

# いま、よみがえる中世の世界

## 「まじないと祈りの世界」

### 第三回 企画展開かる

いま「中世」に人びとの熱い視線が注がれている。それは、人びとが生き生きと歴史の表舞台にあらわれ、新しい仏教や文化がおこった時代だからだ。この度は「まじないと祈り」の世界に焦点をすえ、「まじないの世界」「経塚の展開」「中世の墓地」の三つの小テーマで構成した。

#### まじないの世界

呪術は、古代中世の人びとにとって、生産や生活の上で欠かせない行為であった。庄内北部の八幡町岡島田依田遺跡から、偶然に「まじない」によるは

らいをやった跡が発掘された。その時期は九世紀後半と思われる。

人形代や齊串が人面をえがいた甕に入っており、まわりには馬形代が立てられてあったらしい。つまり人の罪やけがれを人形に託し、馬で異界へ送るとい

うまじないの儀式が行われたのだ。ここは出羽国府に近い場所にあるから、遠く京都から派遣された官人たちがかわわっているものと思われる。

「急々如律令」と書かれた木筒は、悪霊の近づくことを恐れた物忌札の一種。国分寺に比定される八幡町堂の前遺跡の遺跡か



ら出土したもの。その他、米沢市上浅川出土の人形・絵馬の一部なども展示されている。

#### 経塚の展開

経塚とは、仏教の教えの中心となるお経を書写し、筒に入れて、さらに甕をかぶせ、地中に小さな石室をつくり埋納した遺跡である。山形県地方では十二世紀より十三世紀にかけて、僧侶や武士などの上層の人びとによって築かれた。この度は、きわめて珍しい木製の経筒（遊佐町金保経塚）や鉄製の経筒（東根市光明寺経塚）などが展示されている。

また山形市仁田の沢、東根市薬師寺裏山、南陽市烏帽子山八幡宮などの経塚から出土した一括遺物、高島町元和田ババ岳山頂より出土した重量感のある貴重な経筒をみる事ができる。

十六世紀には聖たちによって、廻国納経が行われるが、川西町菊田経塚の小型経筒はその例である。

江戸時代には、礫石に経文の一字ずつを書いて埋納した一字一石経が盛んに行われる。当初の意義は失われ、供養はもとより悪疫退散・村内安全・五穀豊穰・水難除去などまじないの要素がなくなり、農民たち

によっても各地に埋納されている。中世の信仰の一端を示す笹塔婆は、山寺立石寺岩窟から大量に出土して注目されたが、それと古くから知られている羽黒山鏡が池出土の和鏡の新資料も大変貴重な信仰遺物である。

#### 中世の墓地

中世の墓地から発掘された骨壺として使われた「珠洲焼系中世須恵器」がまず目をひく。これらは素朴で力づよい中世を象徴するやきものである。供養塔婆として立てられた板



人面墨書土器



元和田(ババ岳)経塚の経筒

碑も展示されている。最近中世の墓地への関心が高まっているが、やはり霊地や景勝地、先祖の霊が眠る古墳の近くなどに葬られることが多かった。これらを通して中世の人びとの精神生活の一端をかい間見ることができるといえる。

主として各地から出土した蔵骨器（米沢市大神窯跡、羽黒町袋桶、櫛引町柳沢）や、高島町金原古墳羨道部より出土した四耳壺、長井市白山森出土の四耳壺、鶴岡市荒沢出土の越前焼の壺などの他に、米沢市早坂山出土の板碑などが展示されている。

# 考古学入門講座へ 受講申し込み殺到

## 体験学習もふくめ多彩な内容

本館主催の第一期やさしい考古学入門講座は、高島町との共催、県教育委員会の後援で、去る8月21日に開講、月二回ずつ開かれ、1月22日まで開講されている。学長は高梨吉正町長。受講申込みは50名に達し、受講者は20代から70代までの年代にわたり、多彩な顔ぶれ。

講師陣は、佐々木洋治氏（県埋蔵文化財センター）、佐藤鎮雄氏（南陽市立中川中教頭）佐藤庄一氏（県埋蔵文化財センター）

- 10月23日(日) 製作学習  
「縄文琴づくり」(手塚孝)
- 11月12日(土) 「弥生時代」  
(佐藤庄一)
- 11月27日(日) 「古墳時代」  
(川崎利夫)

- 12月10日(土) 体験学習  
「縄文食をつくって食べる」  
(手塚孝)
- 12月18日(日) 「奈良・平安時代の」  
(佐藤鎮雄)
- 平成7年1月22日(日) 「中世の考古学」(山崎正)  
閉講式・懇親会。

### 中世シンポジウム



## 中世の講演会・シンポジウム開かれる 東北各地から70名参加

去る10月15日と16日に、第三回企画展にちなみ本館研修室を会場に、講演会とシンポジウムが開かれた。これには県内はもとより宮城・福島・岩手・東京などから約70名が集まり、多くの成果をおさめて成功裡に終わった。

15日は、東北大学教授入間田宣夫氏を迎えて「中尊寺金色堂の視線」と題する講演があり、会場いっぱい参加者に多大の感銘を与えた。終ってから列品解説があり、夜は遠くからの参

加者も含め湯沼温泉で交流会が行われた。翌16日は、9時から午前いっぱいかけて伊藤清郎氏（山形大学）をコーディネーターとして、誉田慶信・山口博之・水戸弘美・川崎利夫・村山正市・手塚孝の各氏によって、信仰・墓地・経塚・城館などについて報告があった。つづいて質疑と討論が行われ、主として中世の葬法について、各地の例が出され、集中して論議が行われた。

午後からは、山崎正氏の案内で夏刈資福寺跡と長井市古代の丘資料館を、町で提供してくれたマイクバスで見学。再会を約束して午後4時半に解散した。この集会では、「東北中世考古学会」の発足についても提案が行われ、満場の賛意のもと具体化がはかれることになった。

15日は、東北大学教授入間田宣夫氏を迎えて「中尊寺金色堂の視線」と題する講演があり、会場いっぱい参加者に多大の感銘を与えた。終ってから列品解説があり、夜は遠くからの参

午後からは、山崎正氏の案内で夏刈資福寺跡と長井市古代の丘資料館を、町で提供してくれたマイクバスで見学。再会を約束して午後4時半に解散した。この集会では、「東北中世考古学会」の発足についても提案が行われ、満場の賛意のもと具体化がはかれることになった。



入門講座「縄文の琴」づくり風景

- 9月10日(土) 「旧石器時代と生活」(佐々木洋治)
- 9月25日(日) 「縄文時代」(その1)(佐藤鎮雄)
- 10月8日(土) 「縄文時代」(その2)(佐藤庄一)



# 南陽市稲荷森古墳

稲荷森古墳は、南陽市大字長岡にあり、旧赤湯園芸高校の南にある前方後円墳である。かつてはうっそうとした森におおわれ、狐が懐むさびしいところであつたが、いまは南陽市教育委員会によって整備管理が行われ、駐車場や墳頂へ登る道も整備されて、史跡公園として見事よみがえつた。

その後北辺の大型古墳として注目され国の指定史跡となつた。

長軸を北北東から南南西に向け、墳丘の長さ96メートル、前方部の長さ34メートル、後円部の径62メートル、後円部の高さ10メートル、前方部の高さは後円部より低く5メートル。前方部は二段、後円部は三段築成で、

県内では最大の古墳である。まわりに濠がめぐらされた形跡はなく、はにわ茸石も認められない。もともとあつた丘陵の東側を断ちきり、

一九七八、七九年に二回にわたり、県立博物館や県教委によってくわしい調査が行われ、前方後円墳であることが確定され

前方後方形に形を整え、二段目から盛土をしてつくりあげられたものであると考えられる。

掘であることから、まだまだ不明な点が多いが、この頃の置賜一円に勢力をもつた首長の墓であることはほぼまちがいないものと思われ

東北地方で全長50メートルを越える前方後円墳や前方後方墳は30例あるが、稲荷森古墳は六番目の大きさである。かたは前方部が短小で、銚子形を呈する。

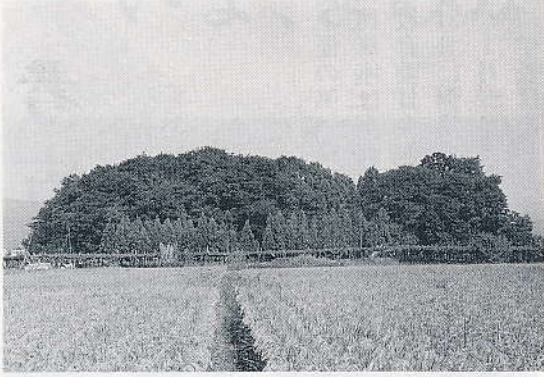
前方部と後円部の中軸線がややねじれを示すことから前方部を半切した古墳であるとの説もある。つまりより上に立つ権力者によって規制を受けた古墳との見解もあり、今後の検討が必要である。

これに次ぐ大きさの古墳は、米沢市宝領塚古墳、川西町天神森古墳であるが、いずれも70メートル台の前方後方墳であり、稲荷森古墳よりは一段階古い古墳とみられる。前方後円墳では、米沢市成島一号墳や戸塚山一三九号墳が50〜60メートルでこれに次ぐ。

このように50メートルをこえる大型の前方後円墳や前方後方墳が分布することは、置賜地方にかなり古い段階から政治勢力が存在し、独自の発展を成し遂げたことを意味して興味深い。

置賜地方には、すでにふれたように50メートルを越える前方後円墳や前方後方墳が現在五基確認されている。しかもこれらの分布は、南部の米沢市の北、北部の南陽市、西部の川西町から米沢市の西など三つの地区にあり、それらの地域ではその後の後期古墳も引きつ

20年前の稲荷森古墳



調査中に墳丘中や墳丘下より出土した土師器が大方四世紀後半の年代と推定されることから、五世紀前後と考えられている。内部主体が未発



整備された稲荷森古墳

畿内政権が勢力を伸長しつつあつた時期に、置賜地域がどのような位置にあり、その政治権力がどのようなものであつたのか、当時の集落遺跡との関連から解明されなければならぬ。これは日本史上重要な課題でもある。

つき生まれ、七〜八世紀代の終末期古墳まで及ぶことは、三つの地区に有力な豪族が居り、平和共存の体制で推移していることを示している。

興味深いことは、七〜八世紀に律令制社会に組み入れられてから後も、郡衙などの役所がこれらの地域を移動しながら、九世紀末までつづいていることである。

置賜地域は古代において、さほど戦乱に巻き込まれることなく平和な地域であつたと考えられるのである。古墳をつくつたのは農民たちであつたが、農村集落も最近高畠町鎌の目南原や寝鹿、また白鷹町廻り屋、米沢市上新田・上浅川などで発掘されており、稲荷森古墳とその後のドラマはより鮮明になつてくるものと思われる。

